明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正七年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿二年「統一」十月號

（第二百八十四號）

法華經と顯微鏡　主任　松尾皷城

自慶安住　大僧正　本多日生

日蓮聖人教義綱要　僧正　井村日咸

法華經流布の時代　文學士　小林一郎

機微譚語（六七～六八）　土佐小掾　沙門眞達　山根靑村

日蓮主義の本領　金坂敎隆

課題和歌發表　子爵　清岡長言選

陽數と陰數　營口　利生堂蓮子

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

（第二十二年九月卷）　「統一」　（第二百八十三號）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正七年九月十五日發行（毎月一回十五日發行）　統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

大僧正　本多日生師著

賜天覽

大藏經要義

菊判洋裝上製函入美本三方金毎卷四百頁以上　正價各壹圓八拾錢　內地送料各拾貳錢

大方廣佛華嚴經（四十卷）（一）緒言（二）此經の要文
大方廣佛華嚴經（六十卷）（一）緒言（二）此經の要文
華嚴重譯經の對照　大方廣如來不思議境界經
大方廣佛華嚴經不思議佛境界分　大方廣佛華嚴經修慈分　大方廣入如來智德不思議經　度諸佛境界智光嚴經　佛華嚴入如來德智不思議境界經　大方廣普賢所說經　信力入印法門經　大方廣總持寶光明經　大方廣圓覺修多羅了義經
（一）緒言（二）此經の譯者（三）此經の五玄（四）此經の通覽（五）全文の講述（六）此經の大意（七）此經の頭讀　大寶積經（一）此經の通覽（二）要文の講述（卷一至卷十八）

八月廿九日發行

第卷目次

○本書は隔月發行十八卷（三ヶ年）完結、一ヶ年前金九圓半年間五圓、送料不要、卷九迄三百六十五經千百二十九卷、卷六迄三版、既刊目次は本年七八月本誌廣告に揭ぐ

新刊　日蓮聖人正傳

四六判　聖人肖像等入　振假名附四百七十餘頁　正價金九拾五錢送料共

本書は最も確實なる史蹟に憑り、聖人一代の經歷と主張とを詳叙す。特に聖人の主要たる著作に對しては一一その內容を紹介し、又時代の背景たる承久の亂と蒙古來とに關しては正確なる史實に徵して之を記述し又後人の添加せる怪誕不稽の記事は悉く之を刪却せり。聖人を敬慕する家庭、修養の力と思想の光とを得んとする人は、速に一本を備へらるべし

五版　日蓮主義

三五判洋裝函入眞蹟挿入美本六百五十頁正價金九拾五錢送料六錢

目次
一、宗敎の必要と其選擇
二、神儒佛三敎と日蓮上人
三、國民道德と宗敎の信仰
四、我佛論に對する批判
五、統一的佛敎觀
六、彌陀の出家或道
七、佛敎信仰の體系
八、法華經壽量品講義
九、日蓮主義の概
十、修法次第
（付錄）本經、祖書要文

四版　修養と日蓮主義

三五判洋裝五百六十頁其他正價送料共同斷

目次
一、日蓮主義の主張
二、社會問題と日蓮主義
三、修養と日蓮主義
四、日蓮聖人と女性
五、日蓮主義より見たる大涅槃經
六、日蓮聖人の信仰
七、日蓮主義の吏命
八、日蓮主義の體道用道

再版　國民道德と日蓮主義

三五判洋裝四百七十餘頁其他正價送料同前

目次
一、日蓮聖人の親たる我が國體
二、國民道德と宗敎の信仰
三、國民道德と模範的人格
四、國家觀の根本問題
五、修養の三方面
六、佛敎の理想的文明
七、日蓮聖人遺文の一篇

人と敎

四六判洋裝函入眞蹟挿入振假名附美本三百八十餘頁正價金壹圓貳拾錢送料八錢

目次
一、人と敎
二、精神の修養
三、三大思想の系統と調整統一
四、敎育と宗敎
五、佛敎虛の信條
六、法華經より見たる佛敎

再版　法華經の心髓

四六判洋裝振假名附四百二十頁正價八十錢送料共

一名如來壽量品統釋　項目八十八ヶ條

東京市外南品川妙國寺內（振替東京三一五九六）

大藏經要義刊行會

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（本誌定價一冊十錢郵稅五厘）▼
（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

法華經と顯微鏡

常眼に映じたる物體が、一度顯微鏡に照さるゝ時は常眼に知る能はざる細微の形狀容態を發見し、新綺の妙巧に接して只管驚嘆の聲を發せしむるのである。今日の科學が其微を鑿ち細を探つて其發達の域を示せし所以の一は確かに顯微鏡の力と謂ふべきである。

日本國體を一個の物體と假定せよ、而して法華經を精巧なる顯微鏡と假定せよ、法華の顯微鏡は我國の精を顯し微を現し其超勝の所以を明瞭ならしめたものである。而して其技師たりし人は即ち日蓮聖人であつたのだ。

諸經に種々な眼鏡の力はあつたであらうが、遂に眞に日本國の大精神を觀取するの存力は有しなかつた、空海の如き國家に對つて眞意を顯現せんと努力した名僧もあつたけれど、其奉持する經の映寫力は遂に之を果し能ふべく劣弱なるものであつたから、奈何とも致し方がなかつた。

顯微鏡に物體を檢視するの自力があつても、物體そのものに超勝の實質がなくば映寫されたるものは從つて劣弱なる容質を曝露したに過ぎぬ。又物體そのものが勝質であつても檢鏡が劣質であつたなら其優越なる効果は顯はれる筈がない。如何に法華經が立派でも我國體が零であつたならば其反映も亦零であつただらうが、超勝せる我國體は經の絶大なる開顯力に依つて其本質の妙實を披露し盡したのである。吾曹は我國に對して法華經を精巧なる顯微鏡であつたと讃歎しても見るのである。

誌本 改正定價並に廣告代價

○一冊十錢、郵送分は別に五厘申受候
○前金送金分に限り郵送料申受ず候
○代金未濟の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年目毎に御便利上集金郵便差上ます（但此場合郵便局手數料五錢加算仕るべく候）
○故に郵便送り當方より集金のものは半ケ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金は壹圓廿錢にて宜しく候
●送金は振替貯金口座東京三三五三三番統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの郵便局）にて御拂込み下され度、確實に御座候小爲替は紛失のおそれが有ます
●領收證は特に御請求以外は本誌上に表として取纒め掲載します
●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五十錢。三分一頁六圓。
▲五號活字十八字詰一行二拾五錢
●交換及び義務廣告はお斷り申候

▲御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の節は御一報を乞ふ、早速御送本可仕候
●當方より集金郵便差上候節、多數の事に付計算相違、又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一報下され度、顧上候
●集金郵便下差度上候節、何かの御都合にて御拒絶の方も有之候樣上は其儘御放任なく業書にて一寸其旨御引續き御送本申上候。又御左樣下され候へば、一報下され候へば、引續き御送本申上候。
●多數の事に付送本を中止仕るべく候
●取消、併せて御返事仕るべく候
●諸君の熱心御盡力に依り我統一が宗教雜誌界中に於て最大多數の發行中に數へらるゝに至りしことを感謝し申候

●日蓮各宗——寺院——御僧●

法衣——草木——直に御聯想下され候儀に候
京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店 電話中七三五番 振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店 電話下谷三四三四番 振替口座東京二四五六八番

●荷も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●

佛像佛具 調度所
位牌木鉦
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
京都寺町四條南大雲院前
御用達
舊名「乾清」事 佛師
大多少に限らず御用奉願上候也
辻井岩次郎 振替大阪八一五七番 電話下三二五八番

●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●

交換廣告及義務廣告御斷り

みたから
▲十月號出づ▼
以後申込者に限り送附することゝせり

移轉廣告
東京府下北豐島郡高田村字龜原五十四番地元寛受院出張所内に移轉致候間此段廣告致候
田島義潤

念珠ならば小野嘉助店へ——
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
●御念珠 各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商 小野嘉助 電話中二六〇八番 振替口座大阪一九七二〇番

自慶安住

（鐵道協會に於て）

本多日生

△自慶安住と自疆不息

私のお話することは『自慶安住』と云ふ事でありますが、此の自慶安住と云ふ四文字は二つの事柄が集つて居るので、『自慶』と云ふ二字は讀んで字の如く、『自ら慶ぶ』と云ふことである。『安住』と云ふは『安らかにとゞまる』とありますが、安らかと云ふのも止まる意味であります或は『定まりとゞまる』と訓んでも宜いのであります。即ち精神修養上に於て自ら慶ぶ感情を養ふ事と、心が定まつて動搖をしない、確乎不拔の精神を鍛へ上げる事と、この二つの事を意味して居るのであります。でこの二つが修養上に於て如何に大切な目標であるかと云ふことは今更私が言ふ迄もない事であります。精神修養上の問題として色々心得べき箇條がありますけれども、それは多く入口であり、又中頃の事であると思ふのであります。其の修養の完成に達した時に顯はれるものは、先づこの『自慶安住』の四字であらうと思ひます。『自疆不息』と云ふ事も無論大切なことでありますが、それは自慶定住と云ふことが無くては、『自疆息まず』と云ふことが顯はれて來ないのでありまして、自慶安住の結果が即ち自疆不息であります。若しさうでなくして、自疆不息と云ふことは消極的である、自慶安住と云ふことは積極的である故に自疆不息の方が更に貴いと考へる人があつたならば、それは少し考が淺いと思ひます。無論この自慶と云ふ自らよろこび、自ら滿足して居ると云ふ事が、何の理想もなく、目的も無くして、ボンヤリして居るならば、自慶と云ふことは價値なき事であります。例へば野蠻人が何の理想もなく、目標もなくして、唯僅かな食物を得れば晏然として眠つて居ると云ふことは、少しも褒められたことでありませぬ、是は苟も修養を論ずる者の間には問題にならぬ事でありまして、『豚として安んぜんよりは人として煩悶せよ』と云ふ言葉があります、豚のやうに何の理想もなく、目的も無く、唯無意味に滿足して居ると云ふやうなことでは、世の文化は沈滯して仕舞ふのであつて、さう云ふ考の足らぬ修養は、今日は最早や思想界には問題とならぬのであります。

△陽明の佛教觀を駁す

併し誤解をする者の間には、佛教の如きは、今の所謂豚として滿足する事を教ゆるものとして、世の進化を壅塞するものであると云ふやうな批評をする人も無い譯ではありませぬ。陽明と云ふ學者がありますが、是は馬鹿ではないのでありませうけれども、併し陽明が佛教に對する智識の方面に於てのみは、彼も馬鹿たる事を免れないのであります。何故かと云ふと彼は三十年佛教をやつたと自ら書いて居ります、併し佛教は詰らぬと思つたから捨てたと斯う言ひます。何故詰らぬと思つたかと云ふ理由としては、佛教の

教ゆる所は唯思想の平和を教へて、恰も精神の昏睡を促すやうなものである、何も考へなへ、うろたへなと唯言ふのであるから、殆ど無念無想、其の極は惰眠を貪るやうな精神に導くものである、それではいかない、人生は先づ活動を意味して居らなければならぬ、事々物々の實際の問題に觸れて活動をしなければならぬ、所謂言行一致、知行合一、凡ての事に觸れて其處に活躍を意味するものであるから、昏睡に導くと云ふことは甚だ宜くない、人を死灰の如く枯木の如くに爲すものは佛教である。と云ふやうな事を言つて、彼は佛教を捨てたと言つて居りますが、確にこの點に於ては陽明は愚者であります。それは何故であるかと云ふと、佛教と云ふものは左樣な事を教へては居らない、佛教を習ひ損ねた坊さんの中にさう云ふ事を云つた者があつたにしても習ひ損ねた坊主を以て佛教と見るやうな人間は、やはり馬鹿たる事を免れぬのである。所が、陽明でさへも、或る意味に於ては馬鹿であるが陽明に及ばざる者が日本には尠からず存して居るから、今猶ほ佛教に對して左樣な感じを有つて居る人もあるか知れぬけれども、それは其の人が何も知らぬのである。凡そ修養を論ずる場合には、儒教でも佛教でも其の型と云ふものは大凡違はぬのである。

△自慶と儒教

今試に『自慶』と云ふ事を儒教の方から立證して置くならば、論語の初めに、學んで時に之を習ふ、亦悅ばしからずや。朋あり遠方より來る、亦樂しからずや。

と云ふ事がある、是は論語開卷劈頭に出て居ることである。この『學んで時に之を習ふ』と云ふことは、即ち修養の話を聽き其の事を繰返へし考へて、修養を積んで行くと云ふことである。其の修養を積んで行くと云ふことは、何んとも言へない所の樂みであると人ふのである。『朋あり遠方より來る』と云ふことも、やはり修養を語り合ふ所の、志しを同じうする友相會して、修養の話を繰返すと云ふことは何とも言へぬ所の悅びであると謂うて居るのである。修養が苦蟲を噛み潰したやうな顏をして、面倒くさい話をするものであると思つて居る者は、馬鹿ナンである。人間に修養のことを教へたものは、論語が名高いものであります、それでもいま言ふ通り劈頭『樂しからずや、悅ばしからずや』と謂つて居るのである。さうして孔子先生は修養が完成したと謂つて宜いのであるが、其の狀態はどうであるかと云へば、

子の燕居するや、申申如たり、夭々如たり。（述而第七）

と云つてありますが、彼は布袋樣のやうに、ニコ〳〵と笑つて居る。修養の完成は即ち自慶にあるが故に、『申々如たり、夭々如たり』と云ふのである。

心廣うして體胖なり。（大學）

と云ふ言葉もありますが、修養の結果は心がのび〳〵して、體がゆつたりして肩の凝りが取れると云ふやうな所に、修養の完成と云ふものがある。

△其二

又孔子の三千の門下生の中に於て、尤も修養の成立つたと目せられるものは顏

淵であるが、其の顏淵は何が故に偉いかと云つたならば、彼は學問があるとか理窟が分かるとか云ふ事でなくして、論語に、

賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人其の憂に堪へず回や其の樂を改めず賢なるかな回や

（雍也第六）

と孔子が言つた通り、又

肱を曲げて之を枕とする、樂み亦其の中に在り。（述而第七）

と云ふことである。彼は陋巷に在つて即ち肱を枕として尙ほ其の樂みを失はない所謂自慶と云ふものを得て居るが故に、彼は斯くの如くであると孔子が稱揚されたのである、この點を以て考へても儒敎でも自慶が修養上大事なことであると云ふことは、能く分るのであります。

△自慶と法華經

佛敎の方で申しますれば、其の意味合を更に徹底的に能く敎へて居るのでありまして、この言葉は法華經などにも出て居ります。又有ゆる經典に出て居る言葉てありますが、法華經のは有名な言葉で、

深自慶幸。獲大善利。

と云ふことがあります。是はどう云ふ場合に言うたのであるかと云ふと、釋迦牟尼が偉大なる所の敎を與へた、即ち完全なる意味に於ける宗敎、道德、哲學、凡そ人間の要求である所の思想の全面に向つて滿足を與へた場合に於て――當今のやうな千切れ〳〵の道德とか宗敎とかそんな小賣り、切賣りをして居るものとは違ふ。人間の精神要求の全部に向つて滿足を與へた、その時にその敎を受けた者の慶びを言表はす時に、何とも申しやうがない、『深く自ら慶幸す』と云ふ、何とも言へない自分の精神の悅びが現はれるその利と云ふものも、決して不正なる利でない、道德と利益とが一致して居るから『善利』と云つて居る、不善にして利を獲るにあらざるが故に『大善利を獲たり』と言つて居る。是は其處に譬が現はれて居つて、頗る面白い譬でありますが長者の息子が乞食になつて永年流浪して居つた。それが段々經廻つて舊の親の所に戻つて來た、併し自分が其處の長者の息子だと云ふことは知らない、親は一時にその自分の財產を與へんとするけれども、その子供は自分は飽まで乞食だと思つて居るから、却つて氣味惡く思つてその財產を受けようとしない、そこで一先づ親はその息子を傭人として使つて、段々に引上げて行つて遂に支配人となつたそこでその長者が親族を相會して、何年何月何日家出したる我が子はこゝに支配人となつて居るこの者である、彼れ自身は乞食と思つて居るが乞食ではない、我が子であると云つて名乘をする、親類の者も、成程さう言はれて見れば何處やら幼な顏が殘つて居る、違ひなからうと云ふ譯で、到頭それが長者の息子であると云ふことが分つた、昨日までは乞食だと思つて居つたのが、今日は長者の息子であると云ふ自覺に立つて、限りなき財產は皆自分が貰つてしまつた、その悅びと同じである。吾々が精神上の要求として不足を感じて居つたものが、悉く充たされたと云ふ悅びの時に、この自慶と云ふ事を言ひ表はして居るのであります。

△精神修養と新古の思想

是は精神上の問題と致しましては非常に大事なことで、決して舊い問題ではない最も新しい、新しい中にも新しいので、自慶と云ふやうな事を會得せない、又其處に何等の目的を置かないで、唯だ財產を造らんとし、名譽を得んとし、現實の上に沒頭して齷齪して居る所の生活方式と云ふものは、最早や中古るなんてある無論人生には現在の爲に活動し、又物質の要求も無くてならぬけれども、それのみに沒頭すると云ふことは、昔もいかぬけれども、今もやはりいけないのである現に歐羅巴の大戰爭が何を敎へて居るかと云へば、國家全體にしても單に實利的の觀念を以て相爭ふと云ふことは、その落着く所はこの歐洲の戰亂に現はれて居るやうな、悲慘なる光景に陷らざるを得ぬのである。又如何に經濟を重んじ、如何に殖產を圖つて見た所が、人生はそれを以て競爭するのみに於ては、眞の幸福は現れない。一面に競爭をしても、一面には道德なり宗敎なり、精神的の悅樂を開拓しない限りに於ては、富は縱し山と積んでも、決して眞の幸福は得られるものではない。それは誠に看易いことであつて、今日富のみを以て眞の幸福を得られると思ふは、中古るの思想と云つても、大分に徵が生えて、芥溜に棄てなければならぬ考である。けれども今日本に於てはこの中古るの考が勢力を占めて居るのであつて、精神の修養を積むことは餘計の事のやうに思つて居る人もある。何か利益の問題であるならば直ちにワーッと集まるけれども、利益と懸離れた時には、閑暇があつたならば行くけれども今日はちよつと用事があるから……餘り暑いから……と云ふやうな事で、それを無駄事のやうに思つて居る、それは中古るの頭である。最新式の頭は、ウンと稼ぐにも稼ぎ、又精神の悅樂を殖やして、一面には勉勵努力して財力の增進を圖るけれども、一面には精神の悅樂を增すと云ふ事の爲に奮鬪する生活が、即ち最も新しい生活である。それは種々人生を研究したる結果に依りますれば、如何に財產を有し、裕福なる地位を得ましても、先づその家庭に於て道德の力が衰へて參つて、家內も個人主義であり實利主義である、息子も早く親父が死ねば宜いナンと思つて、親父の財產ばかり狙つて居る奉行人も金より外は動かぬと云ふやうな家庭を作つて居つたならば、それは富は百萬千萬を以て數へても、其の主人には決して幸福は來ないものである。（未完）

○日蓮聖人の御事蹟奉詠の六

熊澤優子

◎日朗御坊恩師を佐渡に訪ふ

師を思ふ心はいとゝ濱高き八重の潮路もなとはとはなむ

◎北條の甘誘を斥けて山林に隱れ給ふ

今更に地位も黃金も何かせむ身延の山に月を見るかな

◎思親閣

霧ふかき五十まちあまる山坂を登りて仰く父母のおくつき

日蓮聖人教義綱要（第十四回）

井村日成

第四章　教法論

第貳節　開權顯實

如來の出世は一大事の因緣の爲である、一大事の因緣とは一切衆生をして佛の知見に開示悟入せしめんが爲である、此目的を達せんが爲めに佛の教法は顯說せられたのであるが、相手の衆生の根性萬差なるが爲めに、直に其目的を達することが出來ない、止むなく、方便誘引の手段を以つて之を導かれたのであることは前節にお噺致した如くであるが、四十二年間の化導は、萬差の根性を調養して、漸く一乘の道に歸向する丈の準備は整頓したのである、そこで佛陀は、從來の說教は方便であると云ふことを發表せられた、其一部分を發表して、一より多を開出したと云ふことを說いたのが無量義經であるが、此經の說明丈では物足りない日蓮聖人は此時の有樣を開目抄に、

無量義經にて實義とをぼしき事一言ありしかども、いまだまことなし、譬へば月の出んとして其體東山にかくれて光西山に及べども、諸人月體を見ざるが如し。

と仰せられたは、此意味である、法華經方便品に至つて、佛は徐ろに三昧より起つて、先づ佛の智慧の眞深無量なるを讃歎せられて、佛智には方便知見波羅密ありて、無數の方便を以つて衆生を引導し給ふ、權實二智を具足して應用自由なる佛陀の智慧と爲すことを說に爲つたが此は從來の方便の教を開顯せんとして、先づ佛の智慧に方便誘引の力あるを示されたのである、そして

世尊の法は久しうして後、要ず當に眞實を說くべし。

從來聲聞、緣覺、菩薩等の三乘の法を說いて、小涅槃を得せしめたることは佛方便を以つて示すに三乘の教を以てす、衆生處々の著之を引て出ることを得せしめんとなり。

區々の根性を調整統一せしめんが爲に三乘の法を示して誘導したのである、今や時至り、一乘の法を聞くに堪ふるに依つて三乘の法を開廢し茲に一乘の法を示すと云うて、一乘の法を說かれたのが、法華經方便品の廣開權顯實（開三顯一とも云ふ）の文である、夫れ三乘の法は一乘法開顯の曉に於いて、其教そのものが方便權假の一時的言說に過ぎないのであるから、其眞實の一乘教の實體が顯はれ來れば、當然消滅すべきものである、故に開顯を論ずる場合に於ては施開廢の三義あることを天台大師は玄義の中に示された、一乘教に誘引の爲めに三乘の法を說くは爲實施權である、經に（方便品）

第一の寂滅を知しめして、方便力を以ての故に種々の道を示すと雖ども、其實には佛乘の爲めなり。（縮刷法華經九七）

我方便力有て三乘の法を開示す（同九三）

但假の名字を以つて衆生を引導し給ふ

（同九一）

と說くは是なり、既に誘引し終れば一乘の法を顯示す、經に

未だ曾て說かざる所以は說時未だ至らざるが故なり、今は正しく是れ其時なり、決定して大乘を說く（同九〇）

如來出たる所以は、佛慧を說かんが爲めの故なり、今正しく是其時なり（同一〇〇）

時機淳熟して、一乘の法を說くに至れるを說けるなり此は開權顯實である、文中に大乘とは一乘とも佛乘とも同意義なり既に一乘の法を顯說し終れば、三乘の法は之を廢捨すべきなり、經に

十方佛土の中に唯一乘の法のみ有つて二も無く亦三も無し。（同九一）

正直に方便を捨てゝ但無上道を說く。（同一〇一）

三乘の法は假の名字を以て、言說の上に顯はれた丈のもので其實體を存せざるが故に、一乘法の實體顯はるれば捨棄らるべきは當然の運命である、此を廢權立實と云ふ、佛教廣しと雖ども廢權立實の時に於いて但一乘の法のみ存して二乘も三乘も存すべきてない、傳教大師の決權實義に『權智の所作は唯名字のみ有りて實義有ること無し』と言はれたのはこれである、日蓮聖人は之を分別易く、一例を擧げてお示しに成つて居る、念佛無間地獄抄に（遺文一〇九）

譬へば塔をくむに足代を結ふが如し、念佛は足代也、法華經は寶塔也、法華を說き給ふまでの方便也、法華の塔を說き給ふて後は念佛の足代をば切り捨べき也、然るに法華經を說給ふて後念佛に執着するは、塔をくみ立て後足代に著して塔を用ゐざる人の如し。

此御文は念佛字を相對としてお示に爲つて居るが、三乘の教は凡て足代である足代は一時假設的のもので永久に存在すべき性質のものでは無い、塔の實體が出來上がれば取拂はれて仕舞はねばならぬ塔を組む爲めに足代を結ふは爲實施權である、塔を組むは開權顯實である、足代を取拂ふは廢權立實である、工事全部竣工の曉には但塔のみ存して足代は無くなるべきである、然るに、いつまでも足代に取り縋りて居るは愚者の行である、心すべき事ではあるまいか、折角佛の教に近付きながら、一時的假設の教に執着して、實體たる一乘の教に入らざるは氣の毒な事である、斯樣に三乘の法を一乘法に結束して唯一佛乘の外に何物をも存在しないのである、譬喩品の三車大車の譬には此意味が更に一層明瞭に示された、其文に云く。

羊車鹿車牛車今門外に在り、以つて遊戲すべし、汝が欲する所に隨つて皆當に汝に與ふべし。（縮刷一一七）

是は長者たる父の言說である、子供等を誘引して火宅を出てしめん爲に方便を施したのである、子等は父の言を聞いて其願の適へるを以て勇んで門外に出てた是は衆生に三乘の法を施し給ふに譬へるなり、次に小供等は父に向つて羊車鹿車牛車を賜へと願ふたが、門外には羊鹿牛の三車は影も形も無い、唯一の大白牛車があつた。

爾の時に長者各諸子に等一の大車を賜ふ（同一一八）

たとある、一乘の法を與ふるに譬へた、三乘の法は但長者の言說の上に在つたが

實體は存在しないから、彌と云ふ時には實體ある一乘の法を與へられたのである

その時の長者の思召しを說いて

我財物極り無し下劣の小車を以つて諸子に與ふべからず、今此幼童は皆是吾子なり、愛するに偏黨なし、我是の如き七寶の大車有り其數無量なり、當に等心にして各に之を與ふべし宜く差別すべからず（同一一八）

佛の慈悲は一切衆生に對して普く皆平等に蒙むる、偏黨なきが故に一乘の大法を與へて平等に救濟せしめらるゝのである

此は開權顯實せらるゝ譬へなり。

是の時諸子各大車に乘つて未曾有なることを得たり、而も本の所望には非らず（同一一九）

是時に當つて三車の問題は存在しない一乘の大車に乘つて未曾有なるを得て大に滿足して居るのである、而も本の所望に非ずて、元來はこんな立派な大車を求めたのではないが、其希望よりもより以上の大車を得て滿足せるが故に、三車誘引の言說は虛妄の失なしとお說きに成つたのである、是は廢權立實である、此譬說に依つて其權實の關係は了解すべきである。

以上お噺致したことは釋迦牟尼佛お一人の御說敎に就てゞあるが、方便品には此說化の方法は釋尊一人計りでない、過去の佛もそうであつた、現在の佛もそうである、未來の佛も十方の佛も同じ方法に依つて衆生を敎化せらるゝのであると云ふことを說かれた、此を五佛道同の法門と云ふ、十方三世の諸佛が一乘の敎以外に何物をも衆生の爲めにお與にならなと云ふことになるから、十方佛土の中に唯一乘の法のみ有りとお說きに成つた意味が徹底する次第であります、斯樣に衆生誘引の爲めに一時は一法より無量義を生ぜしめて、無量の法門を開出したけれども、時至れば、之を結束して唯一乘の法に歸一せしめたのが如來の敎法である斯く佛敎を觀來れば如來の敎法は秩序整然一絲亂れざるの形である、斯樣に佛陀は四十餘年の敎法を一乘法に結束することを御示に相成つて、此法は五佛道同の法門なりとお說きに爲つたが、未だ徹底せざる點が少しある、それはなんであるか、五佛の間に於ける關係の判明せざることである、五佛共に一乘の法に說いて衆生を引導し給ふのであるが、甲の佛の一乘法と、乙の佛の一乘法と何う云ふ關係であるか、今の佛の一乘法と昔の佛の一乘法とは何う云ふ因緣を有するかと云ふことに就いて何等の解決が與へて無い、之を解決せねば、敎法の統一中心が判明せぬのである、開權顯實の法門は一往其歸趣を示して一乘法に結束はしたけれども、五佛道同の一乘法の中に其中心を示さないが爲めに未だ絕對の歸趣を示されて居らぬ故、今一層進んで絕對統一の歸趣を示すべき必要が生じて來る、故に開權顯實の法門は一往の結束を示した丈のものであつて、眞實絕對の結歸は進んで開迹顯本の法門に依つて示さるゝのである。

此余曩日所贈於法學士辯護士平佐純俊雅君今似之竢城松尾研兄併乞政

大阪　山田秀太郎

肥後橋　南辯士居臨江富景有何如

悠悠自若神之賜此處泰然好讀書

法華經流布の時代（つゞき）

文學士　小林一郎

△戰後の平和戰と邪魔な日本

此世界の大戰爭が濟んだ後は我が亞細亞の形勢はどう變つて來るか。露西亞はあの通りの有樣である、支那は混亂に混亂を重ねて居る、ゴタ〳〵して居つて誰がどう纏めて宜いか分らぬと云ふ有樣である、是が、野心のある者には附込むに最も良い時であります、どうして歐羅巴の野心のある者が之を捨てゝ置く筈がない、今は歐羅巴にしろ亞米利加にしろ、自分達の戰爭が忙がしいからそんな事に手出しをして居れないけれども、此戰爭の後には、手腕のある者は必らず東洋に進行つてやらうと云ふ考は持つて居るに違ひない。苟も自分の國を盛んにしやうといふ野心を捨てない限りは、支那寄り一帶の土地を舞臺として大活動をやらうと云ふ事になつて來る。劒を振ひ鐵砲を握る戰爭が一段落を告げれば必らず智慧の戰爭金の戰爭が起るのである、此智慧の戰爭金の戰爭は五十年續くか百年續くか分らない、其時は、何處から考へても邪魔になる國は日本である。

日本は小さい國ではあるけれども、支那と戰つて支那に勝ち、次に露西亞と戰つて復た露西亞に勝つて、さうして一等の國と稱して、東洋の覇權は己れの手にあると云ふやうな顏をして居るから、向ふから見れば日本位生意氣な國はないのであります。日本人は、近き此間までチョン髷を結うて刀を差して居つたのである、其日本に何事も相談しなければならぬと云ふ有樣になつたのである。そこで日本は生意氣だ、先づ以て日本の頭を抑へなければならぬと云ふ心の起るのは是は人情であります、それは歐羅巴の奴が酷いと思ひますけれども、假りに地位を變へれば其通りである、隣の小僧がいつの間にか自働車を乘り廻すやうになつたならば、誰しも生意氣な奴だと思ふのは人情であります。それで其自働車が衝突でもして引つくり返れば愉快だと思ふのも、是も人情であります。

△戰後日本人の覺悟

何處の國も皆日本に對して敵愾心を持つて居る、それで利害が結付いて、日本の邪魔を爲し日本の信用を傷け、さうしてそこに自分の國の勢力を造らうと云ふ考へは起らざるを得ないのであります。形の上でこそ同盟も協商もありますけれども、腹の底に是がある以上は、此今日の戰爭の後には、恰度日本は獨逸の今の立場のやうになつて、包圍攻擊を受けることになると云ふ事はどうしても覺悟しなければならぬ。商業にしても學問にしても、日本が一つ頭を上げやうとすれば之を抑へやうとする手が五本も六本も出て來ると云ふ事は今日に於て覺悟しなければならぬであります。

其時に、今のやうな生意氣な、嘘つきの見得坊の多い國民で、此難關を乘り切つて行くことが出來るかどうか。今のやうな弛み來つた人の心、他人が成金になつたと云へば皆眼を圓くして羨しがる、さうして自分の脚下をお留守にして浮はついて居るとそれ、斯んな國民に、どうして此苦しい所を泳へることが出來やうか。是が出來なければ迚も駄目である。

△有頂天の國民

戰爭以來儲かつた儲かつたと悅んで居るけれども、僅か十一億か十二億の金に過ぎない、十一億か十二億と言つても僕等にはそんな金は無いから吾々より偉いが。兎に角十一億か十二億である。今は貿易が順潮に行つて居るから此樣に金が入つて來るが、戰爭の前にはどうであつたか。輸出よりも輸入の方が多くつて、外國に拂出す全が年々七八千萬圓あつたのである。今は戰爭の爲に外國が品物が出來ないから日本の品物の賣行きが良いのであるが、若しも是が再ひ戰爭前の狀態に立戻つたならば、年に約八千萬圓の金を拂はなければならぬことになるのである。十一億十二億の金の今儲かつて居つても、年々八千萬圓宛出せば十三年ばかりで無くなつてしまふのである。それで儲かつた儲かつたと言つて有頂天になつて、大分此頃は贅澤になつて居る。吾々が子供の時分には、金の指環の一つも嵌めて居る人は偉いのであつた、所が今は金の指環は何でもない、寶石でも入つて居らなければ指環らしくない、又白金でなければ指環らしくないと云ふ有樣である。何も吾々と一緒になる必要はないが、大分程度が違ふ。昨年の一月でありましたが三越呉服店へ見物に行つた、無論買物などはしないから見物に行つたのです。行つて見ると、大島紬が百圓以上もするのがあつたので、吾々は眼を圓くしたのであります。所が其百圓の大島紬に吾々は吃驚して居るのにそれが今は流行つて居るさうである。世の中の華美になつたこと、贅澤になつたことは實に甚だしいのであります。それがどれだけ儲けたのかと云ふと僅に十二億である。それ位の金を儲けて有頂天になるやうな國民に、どうして此五十年六十年の苦しい所を切り拔けることが出來やうか。どうも難かしい。草木でもさうである。夏暑い時に日に當つて枯れるものは、冬寒い時が來れば直ぐ枯れる。松杉のやうな常盤木は、夏の暑さにも冬の寒さにも堪えて四時綠の色を湛へて居る。僅の儲けに有頂天になるやうな國民は、少しばかり酷い目に遭ふと腰が拔けてしまふのである。

課題和歌『深山鹿』

子爵 清岡長言選

◎天 丹後加佐郡有路上村 廣岡 圓

紅葉散る嵐の末にきこゆなり
深山の奥のさをしかのこゑ

◎地 小石川音羽町 竹内 軋榮

有明の月はみ山にかたふきて
さやかにきこゆ小男鹿の聲

◎人 千葉縣長生郡 渡邊 乾航

栗拾ふ人は歸りて黃昏の
奥山とほくさほ鹿のなく

◎佳作

◎奥山の木の葉をちらす秋風にたえ〳〵聞ゆさを鹿の聲 京都 安良 日將

◎奥山の松の木の間の月影の妻こふ鹿の聲さやかなり 下谷 小柳 律子

◎春日山ふもとのま萩かつちりてやまちはるかに鹿ぞ鳴くなる 雜司ヶ谷 矢野 浪子

機微譚語

山根青村

六七、土佐少掾

一藝一術の士以て興に語るべしと佐藤一齋翁の云はれしは實にさる事にて、一つの道を究め世の許しを受けたるものは自ら人に異なる所あるものなり。土佐少掾橘の正勝は土佐節の元祖にて、大阪境町に住み同町に繰芝居を興行し、寛文延寶の頃盛んに行はれたりしかば、其直弟と云へば自から榮譽他に異なりて聞ゆるなり。或る土佐節を語るもの土佐少掾の門弟なりと稱し、さる豪家に出入して其家女に土佐節を教へ居たりけるが、其者實は土佐の門弟ならざる由或人主人に告げゝれば、主人竊かに彼をして猥狼せしめんと、先づ土佐の掾を其家へ招待し、さて彼男を遽たゞしく呼寄せたり、某は何事にやと急ぎ駈けつけしに、主人曰く今日は幸ひ足下の師匠を招待したり疾く行きて奥にて面會あれと云ひけるに、某は大に驚き如何はせんと途力に暮れしが、さり迚逃げられもせず、進まぬながらも據なく奥へと通り、次の間へ平伏して偖て其以來は我に御無沙汰申したりと挨拶するに、土佐は相應の答をなしつゝ何さま師弟の間の如く見へたりしかば、主人の疑も始めて晴れ其席も無事にて終りたり。さて某は不思議にも土佐の民に、どうして此五十年六十年の苦しい所を切り拔けることが出來やうか。どうも難かしい。草木でもさうである。夏暑い時に日に當つて枯れるものは、冬寒い時が來れば直ぐ枯れる。松杉のやうな常盤木は、夏の暑さにも冬の寒さにも堪えて四時綠の色を湛へて居る。僅の儲けに有頂天になるやうな國民は、少しばかり酷い目に遭ふと腰が拔けてしまふのである。

◎妻こふる心のやみに迷ふらむ月入る山にさ男鹿の鳴く　千葉縣 萬新舍一止

◎友もなき奥山すみの柴の戸になれてもしかの聲はさひしき　下谷 小柳 英夫

◎里遠きみ山の奥にさ男鹿のつまこふ聲ぞあはれなりける　本郷 熊澤やす子

○入選

○月の入る峰に鳴なるさを鹿の聲にめさむる山かけの庵　下總 星野 雲粘

○足ひきのみ山のをくにすむ鹿の妻こふ聲そあはれなりける　下總 春日よし子

○松風のたえ〳〵きこゆ奥山のふけゆくよ半のさをしかのこえ　同 林 ゑし子

○いつはあれとかなしきものはおく山の月に妻鳴ぶさ男鹿の聲　東金 鶴島 正之

○足曳のみやまの秋はさらぬだにさひしきものを小男鹿の鳴く　靜岡縣 佐原 弘風

○見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉ふみわけ鹿の鳴くらん　澁谷 立川 長重

○小夜ふけて月もすみゆく奥山のさひしき宿にをしかなくなり　下谷 小柳 威之

○妻こふる鹿のなく音に夢さめてあはれもふかき深山邊の庵　上總 笠見 樂也

○夜もすがらそこともわかず聞ゆなり深山にとほき棹鹿のこゑ　同 小川 巖司

○よもすがら月かげふみて奥山につま戀ふ鹿の聲あはれなり　同 醍醐 榮司

○山ふかく更行く月の影見つゝ秋の哀れを鹿の嗚

挨拶によりて耻辱を免かれ、のみならず明白に其門弟たることを衆人に認められしかば、大に喜びて其翌日土佐の家に詣り、實は斯く〳〵の次第にて眞に進退谷りしを、存外の御挨拶を受けて始めて奇難を免れたりとて銀二枚を贈りて謝したりしかば、土佐は打笑ひて夫は大なる了簡違ひなり、凡そ土佐の淨瑠璃は我等其家元なり、されば今海内に土佐節を語るものは誰彼となく皆我弟子なり、其許既に土佐節を語るからは是れ亦我弟子なり故に弟子として接待しまでにて別に禮を云ふに及ばず、當然の事なりとて終に贈品を受けざりしとぞ。度量廣くして着眼大なるものと云ふべし、東坡が所謂挾む所大ひに志遠しとはそれ土佐の謂か。（名人行狀錄）

流石は一流の大家、人を容るゝの雅量あり、技を重んずるの德操あり、敬すべき也。顧みて聖祖門下各敎團の現狀は如何、涙別の小感情に囚はれて異體同心の祖訓に背くなき乎、朋黨比周の小我に囚はれて、甲の類乙の寮丙丁互ひに相鬩ぎあるは聯合あるは敵視徒らに蝸牛角上の小爭に、可惜大法光顯の聖業を閑却するの愚を演ぜざる乎。若も適材を適所に配するの識見雅量なく、徒らに類別寮異の差配にのみ齷齪として、高才逸足の徒を虐遇するが如きことあらん乎、以ての外の奇怪事なり。人各〻長所あり短所あり高明の心事もて其長を執りて其短を咎めず、一味和合互に相資けて佛事を光顯ずるの要意肝要なり。修練に修練を加へなば、佛陀の利生神明の擁護を得て、驅烏の沙彌も纏ては人天の導師とならなん、我れ深く汝等を敬ふ敢て輕慢せず、所以者何となれば汝等皆赤の他人ならず、携手事を共にすべき佛弟子なればなりとの思念に住すべし。一個の技藝家たる土佐少據猶ほ這箇の襟度あり、況んや本化の御門下をや。

聖語、修練を修すれば斯る利生にも預らせ給ふぞかし、此は物のはしなり大果報は又來るべしと思食せ。

（大尼御前御返事）

六八、沙門眞達

丹波園部大乘寺の蓮眞達和尚慷慨にして氣節あり、予嘗て綾部了圓寺に住持たりし當時、本山の召命によりて上洛の途次大乘寺を訪ふ。和尚喜ぶこと一方ならず、やア能く訪ねて呉れた貴公の先住は數回の上洛に音便のみて一度も來らず、奇怪の男と思ふて居たに、貴公は若年にも似氣なく此老人を訪ねて來たとは奇特〳〵々々。時に貴公困つた事には内助の君が三日前から逆鱗一方ならずして飯を炊かず、從つて和尚食はざること三日、折角の珍客だが食はすものがない、ヲットよし〳〵到來の煎餅あり是でも喫つて終夜大に法門を談ずべしと。予たるもの驚かざるを得ず試みに問ふ、婆子應ずんば和尚親ら炊ぎ親ら給せば如何、和尚曰く夫が大禁物、聞き給へ此眞達は不肖なりと雖も本化の沙門なり、雖僧の時は師の房に仕へて炊爨酒掃何でもやつたものよが併し男一疋となつて毛利公の準菩提所萩妙蓮寺を董して、据膳給仕のお上人樣となつた已來手に杓子を持つた事がない今更喰はねば迚雖僧の眞似が出來るものか、男が下るアハ、、、聞き給へ此眞達萩の城下であの老婆と妙な中と成て間もなく、寺社奉行から女犯制裁の大騷ぎサ何の萩計りに日は照らぬ、今更戀女房をつき離せるものか、馬鹿こけ、おん出す前に美事おん出て見せると傘一本の東下り、上總で散々苦勞の結果が此山寺へ神輿を据へた身の上サ。維新の際もたゞ眞達では困る生家の姓を名乘れと役場からの嚴達、夫は生家はあるサ、けれども四河海に入りて同一鹹味、憚り乍ら大日本の眞沙門眞達俗姓は名乘らぬと云ひ切つてやつた、沙門眞達では可笑い何歟姓らしきものをと云ふから、夫なら日蓮上人の御門下だから日蓮眞達にして置けとやつたら、日蓮でも可笑しい寧そ日の字を除き蓮眞達ではどうだと懇願的に來たから、マア开處等でよかつべいと結局蓮眞達が本名に成た譯ナ、どうだまづいかナと氣焰當るべからず。予去て老婆を別室に訪づれ、和尚舊知の若法師始めての御入來機嫌を直してはどうだとの一矢手應へあり、流石は此和尚に連れ添ふ女將軍イヤ時に取ての神樣一寸お待ち下さいと走り出たかと思へば、纏ての事ふんだん酒肴を調へ來り、夫より鼎座歡談山勤さ

課題俳句

○神樂

○あな尊ふと神樂の響く鄙村　筐田孤松
○濁酒に撥音勇む神樂哉　山根青村
○御神樂に峠を踏ゆる魚實　青霧怡泡
◎夢に似し蒼月白し里神樂　堀江狸溪
▲評　月の景狀を寫すこと巧妙にして、それだけ神樂の味を浮み出すこと高し
○霜ぐもる殘んの月や神樂更く　同
○神樂果てし霜夜の深し鶏の聲　遺々庵
▲評　以上六句は里神樂を寫したものと見ゆ
○朝神樂人騒のして鳩の群　長尾直水
▲評　都會の神社に於ける巫子舞の神樂を寫したるもの
◎夜神樂に化粧の巫子が嘆かな　遺々庵
▲評　すまして居たのだが嘆は止を得なかつた
○新嚴も面は古びし神樂哉　立川重長
○炎のこる庭火や神の舞果てぬ　堀江狸溪
◎神樂終へて社頭に殘んの月ありぬ　同
◎月三更清流絶えて神樂冴ゆ　同
▲評　二句とも堪吟、一句は月に神樂の餘情を託し、一句は清流音を失して獨り神樂のみ冴ゆるを逢ぶ、構想の巧、工夫の語呂なり
○杜風や庭火に君が片頬光る　辻井筑嶺
◎お神樂や大古の森は笑ひけり　有田麗陽

くなり　常陸　筐田　純榮
○紅葉ちる池に委をうつおきて奥山遠く鹿を入りぬる　名古屋　有田　麗陽
○かけひよりおちくる水のおとすみて深山の鹿の聲さやかなり　同　有田　信子
○奥山の旅の宿にはしなくも妻戀ふ鹿の聲を聞くかな　大阪　長尾猶之助
○さらぬたにさひしきものを深山路に妻戀ふ鹿の聲あはれなり　淺草　山根　日東
○月かけの淋しく照らす深山にも秋を知りてか鹿のなくなり　上總東　俊慶
○月の夜を春日の森にさまよへはさえたる聲に鹿の鳴くなり　小石川　松尾　清明

○追加選者

あり明の月のかたふくおく山のみねよりおろすさをしかの聲

○次回課題『遠山初雪』

○〆切月末まで
○投吟所　東京小石川區白山前一七　統一組織所
▲天位には選者の短册を呈す
▲短册御受取の方は其旨御通知を乞ふ

海鳴るの概あり、鶏犬頻りに鳴いて夜はねんなふ明け離れたり。

武士は喰はねど高揚子、飢ゑても杓子は持たぬとの意氣、本化の沙門が生中俗姓を名乗れるかとの冀張ハよし愚と呼び癡と嘲るとも、そは他人の批評に一任すべし。澱淵たる勝魚のさし身て生一本の芳醇を味ふがごと、氣持のよき男一疋沙門眞達の面貌、今猶ほ髣髴として眼前にちらづき、而も其人既に鬼籍に入りて亡し矣、惜き事してけり。今の世此型の人物に乏しく、時代とは云へ、世渡り上手の恰悧の滔々として皆是なり、心淋しき限りならずや。

聖語、日蓮は日本第一の癡もの也、法華經は一切經にすぐれ給へる經也、心あらん人金を取らんと欲さば囊を捨つる事なかれ、蓮を愛さば池をにくむ事なかれ。（西山殿御返事）

日蓮主義の本領

金坂教隆

近來日蓮主義の聲頻りに高まり、至る處に此聲を聞かざるなし。其言に曰く國家主義、曰く過取主義、曰く統一主義、曰く獨逸主義、曰く何々々數へ來れば枚擧に遑あらず、諸説皆佳矣、然れども是即日蓮主義内容の一端にもて、其大本領を論せば法華經主義のみ、法華經主義とは卽ち折伏主義なり、文に曰く『正直捨方便但説無上道』又曰く『十方佛土中唯有一乘法』又曰く『終不以小乘濟度於衆生』又曰く『若以小乘化乃至於一人我卽墮慳貪此事爲不可』と古哲の曰く『法華折伏破權門理』と、されば日蓮主義とは同上人が生涯把持せられたる主義にして、法華經の意義より流出せし折伏主義なり。方今の時機此主義を措いて教法宣傳の道他に非さるなり。曾つて他黨は此說條を厭うて遺辭を吐いて曰く、日蓮上人の主張せられたる四箇格言なるものは、同上人が宗旨建立の前方便として用ひられし假說にして、宗旨成立の後まで用ゆべきものに非ず、然るを彼の徒宗旨大成の今日、尚是を擬り廻すは彼の徒の誤謬ならく耳と。噫窮せるかな言や、他說を破るに道理文證を擧げず、唯己が憶斷に任かす人何そ肯せんや。我宗祖佛の金口に依憑して毫も私意を挾まず、專ら經證に依て宗を弘む、其決意他黨の全滅我宗の獨立を期とす、異流の一宗一人たりとも眼に遮ぎる限り豈此の聲を止めんや。是我慢に非ず偏執に非ず、大慈悲心より突發するものなり。其言に曰く『一天四海皆歸妙法』と。佛は法華經を說いて始めて本願滿足といへり。宗祖も四海悉く法華經に歸せしめて始めて素懷を遂くるなること知るべし。斯かる深意より出でたる格言なれば、日本の片隅に一宗團を設けたる位にて止むべきに非ず、此聲若止なば我宗は倒れたるなり。而して此聲を厭ふもの他宗は素よりなれども、自宗に於て此聲を放つに吝なるもの〻多きは何ぞや、此聲は是大慈悲を有するものに非されは發すること能はざればなり。されば日蓮上人は、大陳既に破れたり若寡共二陳三陳と打續けと號令せられたり。噫日蓮上人去つて六百有余年、其の間の弘法者能く日蓮上人の遺志を繼けるもの幾何あるや。古來の講話家は此慈悲の二字を分つて、大悲救苦大慈興樂抔と云へど此二文字は是一義なるべし、憐愍衆生之を慈悲と云ふ、此慈悲の强弱に依りて救濟に優劣を生ずるなり。優者は折伏行をとり、劣者は接受を行ず、末法には本化の大士突も出て〻折伏を行じ、像法には迹化出て〻接受を行ずと、涌出品にして迹化の八恒河砂を止ね善男子と制止せられたるは良に所以あるなり。されば折伏は本化深位の菩薩の所作にして、迹化の堪へざる處なるへし。彼の身延三師と稱せらる〻學匠の如きは、迹化初心の菩薩が戸惑して末法に出てられたるには非さるなきか、凡教法の深きは說き難く、教法の淺きは說易し、說難きは聞く人疑懼を懷く、此の故に說人又疲倦を生ず、說易きは聞人直に悅ぶ、此の故に說人又疲倦なし、此の淺きを捨て〻深きに就くは丈夫の心なり。噫日蓮主義は大丈夫に非ずんば行し難きか、然り法華經を弘むる者は大丈夫に非ずんば叶はず、其故如何、此經は如來の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや、噫況滅度後々々々、此文は是宗祖を始め古來の弘法家此經を弘むるに當りて特に身に罪知られたる文に非すや、本已有善の機には釋迦を以て是を將護し、本未有善の機には不輕大を以て是を强毒す。日蓮は不輕の迹を繼げりと、知らず門弟子は孰れの迹をか繼がん、儒典に曰く『教へて倦まざるは仁なり』と、彼の不輕は弟生上慢の罵詈誹謗を厭はす、但行禮拜に勉め、此蓮祖は終生諸難を冒して但信口唱を勵ます、是教へて倦まず導くに懈かず、豈仁且つ慈悲の深重なるものに非すや。

●老婆の勸財

顯木法華宗妙滿寺檀家にして、信徒總代たりし、堺市中の町辯護士故村上貞藏氏の未亡人村上字野子（六四）は、顯本派の篤信者にて同派末剃宗倡として知らざる者なきが、字野子は每年春季に本山で行はるる國禱大會には、全國末剃宗倡が多數登山し、その際倡倡の宿泊につき錢吉貸物商店より多くの湯團を借受け使用することゝて、唯料金のみならず衛生上にも甚だよからざればとて、同派管長の許可を得て、湯團三枚一組上等三十二圓中等二十二圓の豫算を以て五十組（百五十枚）を第一着に新調せん事を企圖し、過日來炎暑を厭はず單身自費を以て、廣島、岡山、兵庫三縣下の末剃を巡回して數百圓の湯團料を現金にて募集し、引續き東京、千葉、靜岡、愛知の府縣を巡回して勸財を爲し東京信者安川氏は百圓を喜捨し、千葉縣は三百圓を負擔し、管長初め宗務廳重役一同も喜捨し、既に千餘圓を獲得し、都合千數百圓の好成績を老婆の枯腕を振つて奏したれば、字野子は此頃入洛本山へ登り萩原本山部長へ喜捨金悉皆を渡し、大悲商店より布類を購求し目下調製準備中なるが、尚ほ各信徒の湯團をも新調するとて、字野子は第二回勸財をなすべく不日山陰地方へ出發の筈なり。

●九月の天晴會

一、日時　九月二十八日（土曜）午後三時半
一、會場　下谷、鶯谷、國柱會
一、講演　曼荼羅木尊に就て　權大僧正　野口日主者

●統一閣日曜講演

九月八日　晴
國民生活の根底　高木木願
龍口法難に就て　井村日成
日蓮上人の感激　本多日生

▲評　森を通して笑ふ聲、それは神樂はやしであつた
▲以上　七句は神社を背景としたるもの大社の拜殿あり、村里の鎭守あり何れも出情の佳句たり
○寒月やかたまりて行辻神樂　松本水城
▲評　かたまりて行くの一語に一行の風雅浮み見ゆ
○夜神樂や心は神のものにして　宮田黃雲
○逝きし友戀しくもなる神樂哉　松本水城
○假時を神樂に耽けて子三人　惟泡
▲山腹の小村灯見えて神樂哉　鼓城軒忍水
▲くら鉢を聲は神樂の歸り哉　同

○やき芋

○夜學罷り懷中に燒芋哉　黃雲
○燒芋に親む九年老書生　同
○燒芋を袂に撮る髯の人　惟泡
◎燒芋に尾を振る犬と鶏と哉　同
▲評　犬と鶏而して之を與へつゝある者は坊か嬶か
◎三十にして燒芋を味へり　同
▲評　この三十男の風格、之れに依りてよく現る、歎吟
○丸燒や温泉の水落す下河原　遼々
○燒芋や切つたる切の細き哉　立川
○燒芋を病母に土產や納豆賣　筑嶺
○燒芋の灯に讀書する男かな　堀江
▲評　着想は面白し、しかし其の「燒芋の灯」お私には解らない
○燒芋や小錢吸かし笈の中　同
○返り馬子馬上で燒芋食みて往く　同
◎燒芋の友爲官となりにけり　水城
▲評　轉た回顧の情に堪へざるべし。歎吟として感じたるも、句想を見るに燒芋の言葉ありて事實は無し、かゝる句如何や
◎燒芋の後今日見ればふけに兎　同
▲水城君以來引續いて御送句を乞ふ
◎燒芋や呑吐す禹域四百洲　青村
○燒芋で天下論ずる書生哉　麗陽
○燒芋や僧侶の部屋問答す　水城
▲評　多數の類句の中にこの三句を採る
○燒芋やかまとに延びあがる子供哉　かね女
◎すれ違ふ人燒芋のにほひ哉　直水
○野道半里燒芋抱て歸りけり　青村
、燒芋や世話女房の赤襷　孤松
▲評　世話女房も赤襷も餘りに古りたれどもさりとて燒芋をはにかみて召す樣も捨てられず採る
▲此題は川柳式に流れたるもの多く之等は背捨てたり
▲燒芋を懷にして歸りけり　忍水
▲火箸にて芋に探りの燈遠かな　同

○次號課題（月末〆切）

火事
冬田

○右投吟所　東京小石川白山前町一七
松尾鉢城へ

傍聽者　九百人餘

九月十五日　晴

一機一緣の小事　梶木日種

日蓮主義より觀たる國政　野口日主

日蓮上人の感激　本多日生

傍聽者　八百名餘

九月二十九日　晴

思想の戰ひ　高木本順

實在的信念の生活　今成日晉

日蓮上人の感激　本多日生

傍聽者　九百名餘

○秋季大會景況　九月二十二日午後一時中總裁本多日生猊下導師の下に本團賛助員先祖累代回向の大法要執行せらる羹定通例

一出座僧員

野口日主　鈴木日雄　井村日成

松田宏榮　田島義潤　池澤日辰

笠原琢瑞　大森體勇　秋山乾英

高木本順　木村義明　外數名

一講演

日蓮主義所感　山田豐次郎

同　小島傳平

同　籠田眞二

日蓮上人の感激　本多日生

餘興　椿田雙演先生傳　天野燁彦

參集者　千貳百餘名

宇都宮安國會より「法華萬歳」の電報ありたり。

○寄進

金拾圓　安川繁種氏

金貳圓　雜賀秀太郎氏

金壹圓宛　長谷川嘉造、中澤平五郎、山田英二各氏

金五拾錢宛　村上伊太郎、無名氏

金貳拾錢　江川忠三郎

御供物紅白菓子は一般參集者に頒布せり。

○第一回晩餐會景況　團長相互の信疎を計り信仰增進の目的を以て每會貳拾名を限り當閣樓上に於て晩餐會を開催することとし、其第一回を九月二十九日開催せり（總裁本多日生猊下は其都度出席懇談せられ會費三十五錢）

出席者　田村佐太郎、松下政子、新井益雄、川島松雄、藤澤智明、若林不比等、木橋利一、內海顯二

山中國次郎、西川要次郎、淺野良吉、小野運八、

林小四郎、千種新八、○角南九八、西村さだ、藤澤ふじ、○今井壽、○今井德三郎

○印を付したるは岡山縣の信徒にして折柄上京參會したるものなり。

○幹事會開催の景況　九月二十二日午後六時より統一閣樓上に於て幹事會を開催し諸般の協議を遂げたり其懇案左の如し。

一幹事審務取扱內規改正の件

一每日曜講演後幹事會開催の件

一團の三部長任命申請の件

內規改正起草委員として玉川山太郎笹田眞二攝學せられ目下起草中迫て幹事會を開催し付議する筈。

●萩教信　萩市に於ては紀野俊雄師布教宣傳に盡しつゝあり、近來殊に成績の見るものありと、八月六日は研讃會例會あり、同師出席。八日は黑川村報德會に臨み、村田軍醫と共に講演、十二日は妙蓮寺に橘香嬢人會を、廿一日研究會を、何れも紀野師出席講演さる。九月六日は研讃會をして今一層の發展を期すべく相談會を催せしと。

●大阪教況

○蓮成寺報　九月十三日夜例月講演會開催、三好信道、京藤義應の二師出演。十七日夜は野坂宅、廿一日は郡山宅、廿二日長尾宅にて何れも上田智量師出講廿四日は秋季彼岸會修行、報恩法筵後講演。廿六日は山本宅、廿七日は小林倉三宅各家庭講話にて上田師出講さる。

○堂閣寺報　九月二日松田宅にて家庭法話、京藤義應師出講。十二日堂閣寺にて上田布教師、京藤二師出席。廿二日彼岸法要を虔修、京藤師の外に川崎布教師の生活の安定と日蓮主義の講演ありたり。

陽數と陰數

七五三連續句の研究

和歌や俳句が五七五の連續句であるのは日本の語句が五字又は七字と言ふ樣に皆奇數語になつて居るからであろうと思ふのである。然らばナゼ日本の語句が奇數語計りであつて、偶數的な語句を用ゐぬのであるが。即ち六字、八字等の如き語を連續的に用ゐぬのであろふか。此疑問に對して誰か既に解決して居る人があるか、寡聞にして知らざるを恥づる。私に思ふ、五七五の連續音調は響きよく聞えるのは不思議でないか、唯習慣よく聞えるのであると言ふ人があらば、ソレは間違ひであろふと思ふ若し習慣上の響きのみならば六字八字の連續音も亦よく聞えべき筈であるから、唯五七五調だけが行はれて六八六、四六四等の偶數的の韻文が行はれぬ筈は無いと思ふ。故に何でも是は他に大なる深き眞理があるべきでは無かろふかと考へるのである。元來世界の數字は皆奇數と偶數とを順々に並べて數える事になつて居る、卽ち一、二、三、四と奇偶交置されて居るのである。而して奇數は陽數と言ふて陽氣を代表し、偶數は陰數と言ふて陰氣を代表する、と言ふのは我八卦省流の說である。伏羲、神農時代から傳へらるゝと云ふ八卦の原理に唯陰陽を基として方位を建て其典名として數を設けたるものであるから數にも陰陽ありと說くのである。（ロシヤ語でも數ニハ男

●豐橋教報　○九月十二日夜龍口御法雜會「御法雜と一昨日御書」松本堅晴、當夜は井上文作氏の一昨日御書五百部の施本及編引の餘興等あり頗ぶる盛會○彼岸會第一日武田文學士有田安道兩師の聯合布教團講演あり○第二日「化城諭品の大要」松本堅晴○同日夜婦人會「日蓮上人の卓越」松本堅晴○第三日「法師品の大要」本松堅晴○第四日「寶塔品の大要」松本堅晴○第五日「提婆品と女惡の成佛」松本堅晴○第六日「信仰の力」山本布教師○第七日「勸持品と色讀行者日經上人」松本堅晴○廿八日夜立正會「佛陀論」松本堅晴「日蓮上人正傳を讀む」文學士滿井信太郎

●福井教報　每月十日旭婦人會例會講演、九月は秋期大會として石井住職の講演其の他餘興あり。廿七日は講演會出演者石井寛俊師なり。

△櫓本左內先生の墓所をして敬意を表する爲、左內公園として多くの樹木を植付、計費約二萬圓の豫算を以て漸次完成を期しつゝあり。

●常陸教信　每月一日は定例の本山講、其他は舊盆の十四十五の二日間說教、廿四日の盂蘭盆講莚、彼岸は初中結の三回法話、何れも六十名以上八九十名の聽衆にて、住職籠田純愛僧都の熱烈なる說法は枯槁の心田に灌かるゝ慈雨の如く、佛種は之に依つて開發せらるゝものあらん。（白帆生）

●千葉縣教信

▲長柄村青年會　九月分の講演を紹介すれば、一月末庄常光坊に於て山田誠心、山本賢乘の二師出講十二日は上野妙典寺に於て右二氏の外に長國育應師出演。二十日山根道協寺に於て山本師と渡邊乾航師出演廿五日力丸雷田寺に於て威島日衛師出演さる。同青年會は不撓不屈宣教に盡しつゝある點多とすべし。

▲彼岸會巡教　九月二十六日竹內無著師は山崎妙行寺に於て巡回講演す、山主開會の辭を述べ、河野見中師前席、聽衆四十名なりき。（竹內顯領氏報）

▲旭青年會第十回總會　九月二十四日秋季臺饗祭を下し總會開催、松源住職西郡睿瑞師及郡農會技師白井氏を聘し一場の講演をなす。來會者二百五十餘名、同會は西郡氏を組會長に推選せんと協定中なりといふ。

▲第七教區戰勝新禱會　第七教區寺院に於ては皇國安泰皇軍戰勝の新禱會を厳修する事に決し、十月五日先づ管事駐在所たる御門妙善寺に於て右舉行す參詣人總代人外多數にて盛會、尙現役戰道隊兵三名出征の三家族を招き懇中本尊を贈りたり。當日の講演は小竹山主、松永會淨、栗原顯有の三師なりき。來る十六日萬龜淨泰寺に於て新禱執行、他は漸次巡回新禱の豫定なり。

▲第參教區青年布教團通信　△九月五日夜茂原町榎町にて雜て出張中なりし宇都宮太郎氏の統一節日蓮聖人傳あり聽衆は二百名、山田竹內それに宮川師等熱力せらる。

△九月七日夜、押日來光寺にて同じく宇都宮氏の統一節あり、渡邊、河野、竹內、宮川、山田諸師出席、聽衆は青年會員其他百餘名。

△八日、味庄光明寺に於て本團例會を開く、當日出席者は渡邊管事外に倉上、山本、稻子、山田、河野、長岡、竹內、宇津木の八氏、布教上に就て協議し、午後よりは組書素讀會をなす。

△八日夜、大加馬道協寺榎家安藤久太郎氏方に於て同じく統一節あり、聽衆壹百名出席僧員は山田、竹內、山本、河野、宇津木の五名。

△九日夜、上野妙典寺に於て同じく統一節あり、聽衆は壹百五十名盛會なりき。

△十日、押日來光寺に於て、第三回教區寺院連人談話會開催す、當日出席者は倉上いち、山本とよ、宇津木よね、山田みつ、河野てる、稻子きさ、長岡初枝、野老せつ、竹內かねの九名なり次回は來年一月山根道厳寺に於て開催することとなれり。

△十四日、押日青年支會秋季總會に就き午後二時より山田、竹內二師打揃ひて事務所なる八幡社に行く、會員二十二名全部出席、支會長の開會辭、會務報告に次で山田誠心師の青年と二宮尊德の幼時に就て述べ、次に竹內顯領洲の所感と題して種々心得べき事柄を演べ性ト女性トアリト說クト聞ケト如何ニヤ）。此說に依つて見れば日本の語句は陽氣的の語計りである陰氣的の語句は用ゐられて居ないのである。ソコデ考ふるに、東洋と西洋とは萬事が皆反對になつて居る。時間から言ふても東洋の晝は西洋の夜では無いか、我等が左側から初める事を西洋人は右側から初める、我等が想像も付かぬと形容する時に、西洋人は想像し能ふ限りと言ふ、道にて擦れ違ふて避ける時にも左右衝突するは事實である。如此、一切が反對であるのは妙なもので、自然の配劑であろふかと思ふ。サレバ言語文字の上にも詩歌韻文の上にも反對的のものが無くてはならぬ筈と思ふのである。サレバ西洋の語句は自然的に六八六等の如き偶數的になつて居るのでは無いかと想像するのである。日出るの國は陽氣的なる語句をのみ使用するのは自然の裏現では無かろふかされば日の入る國は陰氣的な語句、偶數的な語句を用ゐつゝあるべき道理で無いかと思ふのである。誰か此邊の事を深く研究して居ないであろふか、敎へを乞ひたいのである。

十月一日　利生堂蓮子記之

○六句　利生堂蓮子

○空豆に砂利の溜りし野分哉

○軒の糸瓜雨戸打つ夜の野分哉

○突當りの露路の我家に野分哉

○蜩や色付く背戸の唐辛子

○蜩や誰が別莊ぞ崖の上

○槍摘みの振返り見れば又吹ける

られたり。

△十九日、茂原道路布教開催す、出席演說者は山田、山本、竹内、稻子四師其れに渡邊管事も出席各自熱心に日蓮主義の宣揚に努む。

△十五日夜、箕輪關蔵寺に於て宇都宮氏統一節あり、（竹内生報要約掲載）

▲**山武通信**　八月二十六日鄕興村小沼田要本寺施餓鬼會にて說教施行。△九月三日豐海村眞龜淨泰寺施餓鬼會說教開催。△二十七日眞龜淨泰寺にて彼岸會修法後說教開催。以上何れも鷹部乾山師出講さる。

●**青森地明會**　八月二十五日中村氏宅に開く日蓮主義より觀たる社會問題評論

中村藏君　西原藏君

一、讃仰より信仰へ　中村藏君

九月十四日西君宅に開會

一、日蓮主義者の覺悟　阿部秀三君

一、日蓮主義宣傳の急務　中村藏君

餘興として羽米氏試作の新曲「龍口夜半の太刀風」悲壯の調宗祖當年の巨厄を偲ばしめ藝術的布教の要を認め專心斯道に心を搖く氏の熱誠敬賞に餘りあり先以て四大法難の作曲に腐心しつゝありと云ふ、此日野口權大僧正より會員數氏に授與せられたる大曼荼羅及び書畫御寄贈あり拜戴して會員に披露し其入神妙妙の筆致に驚歎し悅可衆心合掌散會青森の天自然の雪近し活動是より機ならん。

●**山陰道より**　松尾兄足下八九兩月は亡父墓參を兼ねて、豚兒の見學修行の爲め千葉縣まで行き、東京にて御伺せしも見參を遂せしは遺憾に候、歸り早々御盆修行もそこ〳〵に廣島まで西下したるとにて、布教を怠りしは申譯なき次第に候。

△八月十四日神奈川在樣青年會にて鶴巻九十名に對して國民道德の涵養を說き、同二十三日市橋家にて第三回家庭講演を開き十種供養を敎へ、九月は廣島より歸りて十三日よりの降雨十四日出水。

△山陰道未曾有の水災　にて、山は崩れ河は溢れ堤防の決潰、濁流滔々幾千町歩の良田は變じて砂礫となり、東御湖畔の町村は全く浸水七八尺より三四尺に及び、高地に在る我坊の門前遮離氏を載せたる船の横づけとなるなど慘狀目も當てられず候、電信電話は勿論不通鐵道線は橋梁の流失停車場の崩潰線路の埋沒七八十の「トンネル」完全なるは少く、有名なる但馬久谷の鐵橋（高三十丈）は復舊工事に五六ケ月を要すべき被害にて候、九月二十四日迄での調査によれば鳥取縣丈けにて死者六十六、行方不明十七、家屋全潰三三一、半潰九五二、流失家屋一六七三、床上浸水二二八九九、床下浸水一〇二二四にて候、目下晝夜兼行にて復舊工事に勤め居り候も、山陰線の全通は豫測出來申さず候、松崎鳥取間は五六日中に開通の豫定に候、以上。（九月三十日朝倉俊逮）

●**京都本山九月布教**

一日　本山國鎭會　日蓮主義　萩原啓門

二日　護正會　審査品講讃　同人

九日　正行院婦人會　自我偈講讃　同人

同夜　同志會北村宅　拾井惠正、清水一乘出席

十二日夜　明德學園、斷刀の價値を久世寛照、御法難に就て萩原啓門

十三日　本山婦人會　日蓮上人御法難　清水一乘

十五日夜　明德學園　開會の辭を久世寛照、正しき信仰を杉若惠龍、根本佛敎とは何ぞ清水一乘講演す。

十五日　天晴會本山、開會の辭を西村喜一郎、眞觀敎要講義を中島靜雨、愚愚問答抄講義を萩原啓門講演す。

十六日　法光院婦人會　國民の力金光孝碩

十六日　本山彼岸初日　現代人の覺醒を促す金光孝碩。

二十二日　久遠寺彼岸會　題目の功德萩原啓門

二十三日　本正寺彼岸會　勸法蓮華經とは金光孝碩

同日　大是院婦人會　到彼岸に就て銀井乾升

二十四日　本山彼岸中日　時處位に就て萩原部長

二十五日　本山時局講演　開會の辭を金光孝碩、時局と國民精神を熊井本光、平和後の國家と宗敎を萩原部長講演す。

同夜　三條青年會館に於て、開會の趣旨金光孝碩　時局と鄕團機　文學博士　三浦周行先生　勞働問題と日蓮主義　管長　本多大僧正

管長には去る二十四日暴風雨の爲北海道線不通にて二十五日午後八時十分に京都驛着、直に自働車を驅て三條青年會館に入り、瞬時の休憩もなく演壇に立たれたり、勵音せし聽衆は大歡喜せり、本山布敎部の活動に感じ西村吉右衛門氏其他の外護に依り盛會なりき。

二十七日　本山彼岸結日　法華經と女性觀銀井乾升

二十九日　本山天晴會　聖愚問答抄讃講萩原啓門

●**宗門未曾有の大業成る**

本化聖典大辭林祝賀慰勞大會

△本化聖典大辭林の思ひ付は宗門空前の大業である。其編輯が全部出來上つたので其のお祝ひと山川長瀧兩主任保坂中村志村等八賢務に對する慰勞を兼ねた大會が九月廿八日に下谷鶯谷國柱會館に開かれた。△監修田中智學先生の辭、山川長瀧兩氏の報告及び挨拶、來賓日蓮宗本妙法華二宗の管長の祝辭等が終つて清宴に移り、餘興として謠曲、長唄、淨瑠璃等巷く田中氏の作になれるものを奏せられたるは俗曲に宗義を含めた弘敎應用の妙であつた。△來賓には本多顯本管長、臨田權大僧正等各派本山並に宗敎役員、宗門雜誌記者、外に山田博士、矢野檢事、高島平三郎、宮岡中將、小原少將數百名であつた。本號紙面に餘裕が少いので充分紹介が出來ぬのを遺憾とする。

●**本化聖典大聖辭林**（第四分册）出づ△正價一圓五十錢、發賣元東京市下谷區鶯谷　國柱產業株式會社書籍部

●**日蓮主義**　定價一部拾錢、東京內幸町一ノ五統一通信社で發行して居る。主義者の見る良雜誌である。

廣告

法子英明（要珠院日治）儀去ヌル八月十八日遷化ニ付其後各地諸賢ノ御厚情ヲ以テ弔詞弔電弔書並ニ御香料等御惠贈ニ預リ深ク奉感謝候本月五日ヲ以テ盡七日忌ノ法要モ終了仕候間乍延引御禮申上候

追テ生前御厚誼ヲ蒙リ候段併セテ御禮申上候　敬白

大正七年十月

岡山縣英田郡土居
本典寺住職
中學統　牧田英長

布田 **眼の藥** 効能、たゞれ目、かすみ目、ほし目、くもり目、ちゝ目、つかれ目、はやり目、トラホーム等　定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓

布田 **血の藥** 定價壹袋、拾錢、貳拾錢　効能、男女ちの道、產前產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絕、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、

千葉縣山武郡源村上布田參百番地　藥王寺

布眼藥　田血の藥　**本舗　齋藤日章**

（御注文は總へて下記振替に）（振替東京第六七九一番）

●本誌掲載の廣告店は皆信用あり確實なる良店舗なり御信用の上御注文あれ

日蓮宗法衣專門

青雲帽　帛紗服　袴

定價表ハ御申越次第何時ニても御送申上候

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北

振替口座大阪六八四七

日本橋區坂本公園　加賀料理　**加能亭**

佛像佛具位牌木鉦　大販賣所

宮殿幢幡天蓋其他一式

●各大御本山御用達

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層勉强仕り莊嚴品一式陳列仕置候

郵稅四錢　定價表ハ御一報　次第送呈仕可候

小賣部　京都三條小橋東入南側

三法堂佛具陳列場

長距離電話中貳七八參番　振替口座東京貳〇七壹　大阪四貳五九

卸部　京都市三條通小橋西入

本舗　**三法堂　藤田總治**

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正七年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿二年　「統一」　十一月號

統一

（第二百八十五號）

前列右より槊原顧有、成鳴日衛、中村日錦、木多日生、山岡日紹、竹内無著、土屋賢生
後列右より二人目、鶴岡峯之助、片岡盛助、萩原善左右、鈴木氏、都筑氏

本號掲ぐるところ本多大僧正の『自慶安住』の續。……井村僧正の『日蓮聖人教義綱要』の續。……小林文學士の『法華經流布の時代』完。山根僧正の『機微譚語』……外に『泗水の紫彩』……『中京の紅霓』見るべし……

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正七年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町

大僧正　本多日生師著

賜天覽

大藏經要義

菊判洋裝上製函入美本三方金毎卷四百頁以上　正價各壹圓八拾錢　内地送料各拾貳錢

大方廣佛華嚴經（四十卷）　（一）緒言　（二）此經の要文
大方廣佛華嚴經（六十卷）　（一）緒言　（二）此經の要文
華嚴重譯經の對照　大方廣如來不思議境界經
大方廣佛華嚴經不思議佛境界分　大方廣佛華嚴經修慈分　大方廣入如來智德不思議經　度諸佛境界智光嚴經　佛華嚴入如來德智不思議境界經　大方廣普賢所說經　信力入印法門經　大方廣總持寶光明經　大方廣圓覺修多羅了義經
（一）緒言　（二）此經の譯者　（三）此經の五玄　（四）此經の通覽　（五）要文の講述　（六）此經の大意　（七）此經の類讖　大寶積經　（一）此經の通覽　（二）要文の講述（卷一至卷十八）

目次

第九卷　八月廿八日發行

目次

新刊

日蓮聖人正傳

四六判洋裝函入眞蹟挿入振假名附四百七十餘頁正價金九拾五錢送料共

本書は最も確實なる史蹟に憑り、聖人一代の經歷と主張とを詳叙す。特に聖人の主要たる著作に對しては一一その内容を紹介し、又時代の背景たる承久の亂と蒙古來と に關しては正確なる史實に徵して之を記述し又後人の添加せる怪誕不稽の記事は悉く之を刪却せり。聖人を敬慕する家庭、修養の力と思想の光とを得んとする人は、速に一本を備へらるべし

○本書は隔月發行十八卷（三ヶ年）完結、一ヶ年前金九圓半年間五圓、送料不要、卷九迄三百六十五經千百二十九卷、卷六迄三版、既刊目次は本年七八月本誌廣告に掲ぐ

四六判洋裝函入眞蹟挿入振假名附四百七十餘頁正價金壹圓貳拾錢送料八錢

人と教

目次

一、人と教
二、精神の修養
三、大思想の系統と調整統一
四、教育と宗教
五、佛教徒の信條
六、法華經より見たる佛教

四六判洋裝振假名附四百二十頁正價八十錢送料共

再版　法華經の心髓

一名如來壽量品統釋　項目八十八ヶ條

東京市外南品川妙國寺内（振替東京三一五九六）

大藏經要義刊行會

五版　日蓮主義

目次

一、宗教の必要と其選擇
二、神儒佛三教と日蓮上人
三、國民道德と宗教の信仰
四、破佛論に對する批判
五、統一的佛教觀（付錄）
六、釋尊の出家成道
七、佛教信仰の體系
八、法華經壽量品講義
九、日蓮主義の概觀
十、終法次第

三五判洋裝函入眞蹟挿入美本六百五十頁正價金九拾五錢送料六錢

四版　修養と日蓮主義

目次

一、日蓮主義の主張
二、社會問題と日蓮主義
三、修養と日蓮主義
四、日蓮聖人と女性
五、日蓮主義より見たる大涅槃經
六、日蓮聖人の信仰
七、日蓮主義の使命
八、日蓮主義の體道用道

三五判洋裝五百六十頁其他正價送料共同斷

再版　國民道德と日蓮主義

目次

一、日蓮聖人の觀たる我が國體
二、國民道德と宗教の信仰
三、國民道德と模範的人格
四、國家觀の根本問題
五、修養の三方面
六、佛教の理想的文明
七、日蓮聖人遺文の一篇

三五判洋裝四百七十餘頁其他正價送料同前

▲本誌定價一冊十錢郵稅五厘▼
▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）